

伸びる子は、知識の多い子よりも、考える力のある子。

作文の勉強で考える力を育てると、作文だけでなくどの教科の成績も伸びる。

1. いざというときに伸びる力は、成績よりも作文力に表れる

今、世の中で活躍している人で、子供のころからずっと成績がよかったという人はあまりいません。ほとんどの人は、普通の成績で、途中いろいろな脱線を経ながら成長しています。そして、ある日やる気になったときに、猛然と勉強を始めて実力を発揮していったのです。

そのやる気になったときに、ぐんぐん伸びる人と、あまり伸びない人とがいます。必要なときに伸びる力があることが大事です。小さいころから、コツコツと成績を積み上げるというやり方だけが勉強なのではありません。小さいころはよい頭を作っておき、必要なときに集中して勉強するというのが実は最も無駄のない方法です。

いざというときに実力を発揮するためには、思考力、創造力、表現力を育てていく必要があります。それらは、主に作文力という形で表れてきます。

成績からはその子の過去の勉強のがんばり度がわかりますが、作文からは、その子の本当の実力がわかるのです。



2. これからの社会に必要なトータルな学力を支える作文、読書、暗唱の勉強

現在の入学試験は、志願者を限られた定員に抑えるために、点数の差が大きく開くような問題を中心に出不好されています。すると、それに合わせる形で、学校の中での勉強も、差がつくところを中心に教えられるようになります。学校の勉強が差がつきやすいところの学習中心になっていくと、それに合わせる形で、さらに入試問題も差をつける方向でテストをするようになっていきます。

このようにして、現在の大学入試は、受験の教科数を絞る一方で、その少数の教科の中で小さな差を大きく拡大するような問題になっています。このことは、日本の高校生の学力をかなりゆがめています。

これからの社会では、どの教科もひととおりできるというトータルな学力が要求されるようになります。そのような幅広い学力に対応するためには、物事の根本を本質的に把握する理解力が必要になってきます。この理解力をつけるために、作文、読書、暗唱という形の勉強が役に立ちます。



3. みんなと同じ勉強を詰め込むよりも、重点を絞った勉強で頭をよくする

子供の生活は、1日24時間の中で限られています。しかも、子供は、成長する期間も限られています。その年代は、一生戻ってこない貴重な時間です。ですから、家庭生活の中では、子供の教育を何よりも優先して考える必要があります。

今の社会は、昔と違って、多くの子供が塾や習い事に行くようになっていきます。しかし、人と同じような勉強しているから安心できるかというと、そうではありません。他人と同じ路線で勉強していると、もっと時間をかけてがんばるという方向に進みがちです。ところが、教室で先生に教わるような形の勉強は、きわめて能率が悪いのです。

塾や習い事の勉強の多くは、学校で一斉授業を聞いているときの勉強と本質的には変わりません。聞かなくともともと分かっているという無駄な時間がかなりあるのです。能率のよい勉強は、ひとりでやるか、専属の家庭教師がつくか、両親が徹底して面倒をみるか、いずれかの形の勉強です。このような勉強であれば、もっと密度の濃い、無駄のない、したがって余裕のある勉強ができます。

時間をかけて成績をよくするのではなく、重点を絞って頭を良くする、というのが言葉の森のすすめる勉強法です。



4. 子供たちの学力は、家庭で決まる

学力は家庭でほとんど決まります。もちろん、学校や塾で先生が教える教え方によって、成績が早く上がったりのかなか上がらなかつたりということはありません。そこだけ見ると、先生の力は大きいように見えますが、しかしそうではありません。先生は、植物の栽培で言えば、花を咲かせる段階のテクニックを知っているのです。

先生が、教え方の技術によって子供たちの成績を上げることができるように見えても、そのテクニックが生きてくるのは、その子のもともとの実力までです。つまり、植物で言えば、張っている根っこの力の範囲までしかいい花を咲かせることはできないのです。



5. 言葉の森の勉強を中心に、重点を絞った家庭学習で力をつける

普段の勉強は、自宅で進める勉強が最も安上がりで最も能率のいい勉強になります。英語は、教科書を丸ごと暗唱できるまで繰り返し音読することが勉強の中心になります。数学は、やや難しい問題集をできないところがなくなるまで反復して練習することが基本になります。それ以外の教科は、学校で勉強しているだけで十分です。

子供の教育で費用と時間をかけるところは読書です。読書によって日本語の力をつけることが、家庭学習の最優先の課題になります。しかし、家庭学習の弱点は、読書が易しい読書に留まってしまいなかなか難しい読書に進まないことと、作文を書く機会が子供の力だけではとりにくいことです。また、言葉の森で行っているような暗唱の習慣もなかなか作れません。

言葉の森で週1回作文を書き、毎日の音読と暗唱と読書の自習をして、それ以外は英語、数学の自学自習を進めていくということが、子供の生活にとって理想的な勉強の進め方になります。



6. 学歴と学力の相関が弱くなるにつれて、ますます本当の学力が重視される時代に

成績をよくする時代は終わりつつあります。これからは頭をよくする時代です。

江戸時代の藩が県になり日本の一部になったように、現在の日本は、これから、世界の中の一つの国という面をますます強めていきます。日本で名前を知られた大学でも、世界の基準でいうと様々な大学の一つでしかなく、世界的な基準では、学歴は「参考までに聞いておく」という程度のものになっています。

日本でも、最近増えているAO入試や内部進学によって、学歴と学力の相関は弱くなっています。さらに、学歴と実力については、もっと弱い相関しかないと思う多くの人が感じるようになっていきます。

成績をよくして希望の大学に入ることは、もちろん大事なことです、それだけでは、まだ出発点に立ったにすぎない、ということなのです。



7. 言葉の森の特徴は、実力のつく本格的な作文指導、電話指導と高い提出率など

言葉の森は、他の教室とは違ういくつかの特徴を持っています。

第一は、教材がすべてオリジナルであることです。その結果、受験コースなど臨時の課題に対しても、オリジナルな教材を作ってすぐに対応することができます。

第二は、小学校一年生から高校三年生まで一貫したカリキュラムで指導していることです。言葉の森の生徒の中には、小学生のころから始めて高校生まで勉強を続けるという生徒が少なくありません。このように作文指導だけで一貫した指導体系を持っている教室は、ほかにはほとんどありません。

第三は、通信指導を毎週の電話指導によって行っていることです。毎週の電話指導を、個人的な規模ではなく組織的な規模で行っているところは、ほかにはまずありません。この電話指導によって、通学教室と同じような指導環境を作るとともに、夜遅い時間でも自宅で学べる仕組みを作っています。

そして、これらの結果として、生徒の作品の提出率がきわめて高いことです。生徒の多くは、ほとんど毎週休みなく課題を提出しています。都合により休んだ場合も、振替で電話指導を受けることができるので、ほとんどの授業を消化していくことができます。



8. 公立中高一貫校の作文入試にも対応。言葉の森の受験コース

公立中高一貫校が人気です。この理由は、公立中高一貫校が本気でいい教育をしようと考えていることを、多くの人が感じているからでしょう。入試問題を見ても、よく考えられた良問が多く、実力のある生徒を集めたいという学校側の気合が感じられます。

また、これまでの私立中学受験で無理な勉強を小学校のうちからすることへの反省も、公立中高一貫校の人気を支えているようです。

人間の成長の自然な姿は、小さいころはたっぷり遊び、成長するにつれて勉強するという形です。小学校時代はよく遊び、中学高校大学になるにつれて学問に目覚めていくというのが、本来の成長の姿です。小さいころは、読書や趣味や家族との対話によって幅広い人間力の土台を作っていくことが大事なのです。

言葉の森では、公立中高一貫校の入試に向けて、作文試験の受験コースを開設しています。これは入試の四ヶ月前から毎週一回の割合で過去問に合わせた作文課題を書く練習をしていくコースです。

四ヶ月という短期間では、実力はあまり変わりません。しかし、その生徒が持っている今の実力を生かして最もよい作文を書けるように練習していくというのが受験コースの目標です。

言葉の森の指導で、毎年多くの生徒が作文試験に合格しています。



9. 言葉の森ですぐに上達する作文。しかしスタートはできるだけ低学年から

言葉の森で生徒が勉強を始めると、すぐに作文が上手に書けるようになります。来てすぐに上手になるというのが、言葉の森の指導の一つの特徴です。

しかしそのあと、進歩はなだらかになります。このなだらかな進歩の期間も、先生が見る目からは作文力は上達していますが、本人にとってはあまり上達しているように見えません。

けれども、一年間ぐらいたつと、本人自身が自分でもうくなったということを実感してきます。上手になったことが確実に実感できるまでに、高校生でも大体一年間かかります。

ただし、これは、熱心に取り組んだ生徒の場合です。熱心というのは、課題を事前に見て、書くこと自分なりに準備してくることです。

しかし、一年間で、自覚できるくらい上達したとはいっても、根本にある語彙力や思考力の差はなかなか埋まりません。上手な子と普通の子の作文の実力が短期間で逆転するようなことは、なかなかないのです。

だから、作文の勉強は小学校の低学年からスタートする必要があるのです。

